

第18回庭野平和賞受賞記念講演

ご列席の皆様

二千年前、東方の三博士がエルサレムへ平和の王者を探しにやってきました。ついに彼等がその方をベツレヘムで探し当てた時、彼等の心は喜びに満たされました。

本日、私はその同じ聖なる土地から、東方の国日本に旅してまいりました。庭野平和財団という、もう一人の「平和の王者」にめぐり会い、教えを受けるためであります。庭野日敬師の“すべてはわか師”を拝読した今、私は師の勇気に満ちた平和活動にただただ賛嘆するばかりです。宗教指導者の模範を世界に示された庭野日敬師に、私は一人の巡礼者として深い畏敬と尊敬の念をいだくものであります。この度、ここに権威ある庭野平和賞をいただきますことは、名誉であるとともに、私の心を謙虚に導くものであります。

神は預言者の時代を今だに終らせたもうてはいない---これが私の確信であります。神は預言者の出現の地を、彼の聖なる土地、中東の地に限りたもうてはいないのです。聖なる光は日本の地にも輝き、すべての信仰あるものが力を合わせて、互いの尊敬と信仰によって結ばれた、多様で多元的な社会を作りだそうと招き寄せるのです。あなたが他者にして欲しいことを、他者にしてあげなさい。この教えを、私は同胞であるイエスから学びました。仏教では、あなたが痛みを感じるであろう仕方で他者を傷つけてはならない、と教え、ユダヤ教では、あなたがいやがることをあなたの同胞にしてはならない、と教えます。イスラム教では、自らに欲することを同胞に対しても欲するようにならなければ、信仰者でない、と喝破しています。キリスト教のみが神と聖霊とを独占するものでないことを、私は信じます。我々の創造主は、特定の宗教や国家に限定され「キリスト教化された」神ではないのです。

皆様の前で、私の社会的出自の複雑さに触れさせていただきます。私はパレスチナ人であることを誇りに思っております。私の国籍はパレスチナ人ですが、同時に私はイスラエル国家の市民であります。私の母国語はアラビア語であり、私はキリスト教徒です。パレスチナ人でキリスト教徒であるというだけで、すでに常識をこえた複雑さです。アラブ人がイスラエル市民であるといったら、どれほど一層複雑な状況か、おわかりいただけるでしょうか。ましてや、これらの対立するすべてを一人の人間があわせもつことなど、どうしてできるでしょうか。一体、どの属性が優先されるのでしょうか。私は迷いました。そしてついに一人の人間として、神を信ずるものとして、すべての他者に対する同胞として、他の結びつきのどれにもまさって、先ず私は「いのちの子」であることに気付いたのです。私は自分が神のかたちにならせて創造されたたものであり、創造主に姿が似せられている、と信じます。神が創造したもうた全てのものの中で、生まれてくる赤子の一人一人、ひとつひとつの人格が、もっとも美しく、価値あり、尊いものであると信じます。

私の父の家と私の村を破壊したイスラエルの兵士を思い出す時、祖国の土地から同胞であるパレスチナ人を追放したイスラエル軍を眺める時、今なお続くパレスチナの占領という醜い行為を考える時、私は、兵士も、軍隊も、ユダヤ人も、神のみ姿に似せて創りだされた子なのだと、自分にいつてきかせるのです。

私は聖書にある、創造主が人間に問い掛けた最初の二つの問いを思いおこします。人間がはじめて悪事をなして隠れていた時、主なる神は人によびかけていわれたのです。「あなたは、どこにいるのか」と。人が最初の殺人をおかし、殺人者が尊大とみせかけの安心感につつまれていた時、主は、次の決定的な問い掛けをなさったのです。「あなたの弟はどこにいるのか」と。

私は、この世の尊大で力の強い者どもに、この二つの問いをもって襲いかかりたいとしばしば思ったのです。「あなたは、どこにいるのか」「あなたの兄弟はどこにいるのか」と。ユダヤ人の男女の同胞を大虐殺した恐ろしいナチス・ドイツ人に対し、150万人をこえるアルメニア人を虐殺したトルコ人に対し、300万人以上のカンボジア人を皆殺しにした政権に対し、ルワンダとエルサルバドルから同胞を追放した者どもに対し、どれほど私は怒りを爆発させたいと思ったことでしょうか。広島の殉教者や、20世紀の数多くの大虐殺の犠牲者達のことは申すまでもありません。私は、自分がイスラエルに住む全てのユダヤ人の良心に入り込み、話しかけられたら、と、どれほど願ったことでしょうか。「あなたは、なぜかくれているのですか。どこにいるのですか。パレスチナの兄弟はどこにいるのですか。一体どうして、汝殺すなかれ、という神の戒律を、あなたは忘れていられるのですか」と。

この世界に、宗教的多元主義を推進する庭野平和財団という組織があることを、私はありがたく思います。私達宗教者は、創造し破壊する途方もなく大きい力を与えられていると信じます。私達に与えられた力を、世俗主義と宗教的排他主義を広めるために使うべきでしょうか。宗教を分裂と破壊の言い訳に、追放と根絶の言い訳に使うべきでしょうか。答えは、否です。21世紀の人類は、世俗主義と宗教的排他主義により深刻な脅威を受けています。私はこれに対し、全ての宗教とあらゆる宗教者が力を合わせて、このような惨事と災難を避けるよう呼びかけます。私達は人類社会を作り直し、社会に希望を与えるよう、神から求められているのです。私達は、少数者の権利を保護し、この小さな地球上のいのちを保護し育てていくことを求められているのです。もし私達が手を取り合って「他者の他者であるゆえん」を受け入れないなら、地球上の全人類と我々自身の生命を危険にさらすことになるのです。「他者の他者たるゆえん」を受け入れるということは、私達の現在の在り方に対する挑戦状であり、結果として私達を豊かにし、私達一人一人の信仰の意義を深めるものです。

かつて私は難民にされ、国外に追放され、第二級の市民とされ、見捨てられた人間におとされた時期がありました。かつて被害者であったユダヤ人、そのユダヤ人中のもっともみじめなユダヤ人のように、私は自分の境遇を感じざるを得ませんでした。この経験にもかかわらず、というよりむしろこの経験のゆえに、私は自分の社会環境を作り直し、すべての人が特定の宗教や国家の成員である前に、まず「いのちの子」としてあつかわれるようにしたのです。あらゆる宗教、国籍、政治的信条をもつ学生に開かれた、マー・エリアス学園を創設した理由がそこにあります。出発点となったのは、1982年に80人の生徒と4人の教師で開校した高等学校でした。現在、約4,000人の学生と教師が、マー・エリアスの教育施設で学び働いています。

平和を達成する職務は、平和条約を調印してこと足れりとする傾向のある政治家、大臣、首相にのみ負わせてはなりません。平和を涵養するためには、平和の根を植え付けねばなりません。その根とは、若者の心の中にある正義感と誠実さです。正義と誠実、全体性と完全性、安全の保障と安全であること---これこそが、アラビア語のサラーム、アラム語のシュローモ、ヘブライ語のシャロームの真の意味ではありますまいか。これはパックス・ロマーナ、ローマ帝国のもたらした平和、とは全く違った概念です。ローマ帝国の平和とは、多分に、公共の場の平穏と、弱者が強者の支配に服することを意味していたのです。奴隷と主人の間の平和は、真の平和ではありません。私の理解では、平和とは心の特質が日常の生活に表れることです。平和とは、他者の他者たるゆえんを、寛大に歓迎することです。我々がお互いの複写物でないことは、何とありがたいことでしょうか。違いがあつてこそ、お互いに補っていくことができるのです。私達に多様性があるからこそ、寛容と、尊敬と、相互受容の交響楽を響かせることが可能なのです。私は、地球上の全人類が、人はパンのみにて生きるにあらず、ということをお願いしてほしいと願います。我々は宗教の基本原理の理解によってのみ生きているわけではありません。我々は神権的な政権により支配される必要はありません。我々が必要としているのは、生活を律するための神を中心にすえた原則なのです。これらの原則は日常の生活において実践され、他者との関係においても実行されねばなりません。そして、創造主の問い掛けに対し、「主よ、わたくしは兄弟の保護者です。」と答えることができなければなりません。

マー・エリアス学園で、私達は、誠実さと相互の尊敬を持ちつつ共同生活をするのが信仰を強めると信じ、これを実行しています。私達は絶望と希望を、悲しみと喜びを、ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒、その他の人々と分かち合っています。現在仏教徒の学生が在学して貢献していないことを残念に思います。仏教の慈悲という強い概念から、私は多くを学びました。故庭野日敬師は、開かれた心にもとづく人間性の涵養という仏教の考え方を示され、最高の尊敬を受けていらっしゃいます。世界宗教者平和会議の創設を通じて、宗教者間の協力を現実に推進されたのです。庭野日敬師の記憶が永遠に留まりますように、多くの後輩が師の道をたどりますように、お祈り申し上げます。

私は、キリストの地における、キリスト教徒の物理的存在と生存にかかわる試練に直面しています。キリスト教徒のコミュニティーは、聖地においてますますその数が先細りに

なっています。争いが絶えず、抑圧的な生活に耐えるよりは移民となることを選ぶ人が多いからです。お考えになって見て下さい。日本の国から仏教徒がいなくなってしまうことを。同じ意味で、聖地からキリスト教徒がいなくなってしまうことは考えられません。キリスト教は、西洋の産物ではないのです。パレスチナ／イスラエルという小さな国に灯された炎が、今や世界中で輝いているのです。聖地から教会やモスクが消滅するほどの危機はないにしても、神の目と、歴史と、あるべき人間性の観点から、生身のキリスト教徒の方が、全ての石造物や遺跡を合わせたより大切なことは疑いありません。私が全ての宗教者に呼びかけて、聖地に住み続ける小さな少数派のキリスト教徒を守る活動に参加していただきたいと、お願いをする理由です。神は邪悪を目にされ、神の子らの苦しみに心を痛め、圧迫から解放するため腕を差し伸べていらっしゃいます。宗教者は、兄弟姉妹を圧倒する邪悪を目の当たりにして、なおかつ無関心と無行動の道をとれるのでしょうか。平和と正義は熟慮を必要としません。苦しみの中にある兄弟姉妹は、私達が多元性を保ちつつ手を取り合い、立ち上がり行動することを望んでいます。自らの手を汚して、はじめて私達は、正義と誠実のあかしをたて、平和と安全を、創造主の姿に似せて創りだされたすべてのものの上にもたらすことができるのです。

私が受賞の栄に浴することとなりました庭野平和賞は、聖なる土地に比類無き大学を建設する礎石となることを運命づけられております。このクリスチャン・アラブ・イスラエルという性質を持つ大学は、あらゆる国からすべての宗教を迎え入れ、過去に多くの文明の十字路であり、3つの一神教の発祥の地である聖地パレスチナ・イスラエルに、希望をもたらす一つを中心となるでありましょう。ガリラヤの地から世界が平和の王者と呼ぶイエス・キリストがやってきました。その人は私の同郷人であり、私の勇者であります。ガリラヤから、私共は希望のたいまつを灯し、宗教的多元主義と多様性の中での連帯というたいまつを、さらに燃え上がらせたいのです。

大学の建設は礎石を置くことで終わりません。庭野平和財団は、最初の石をお贈り下さいました。今後、私は全世界の他の組織に働き掛け、ガリラヤ平和大学の白い礎石がさらに寄贈されますようお願いする所存です。

このグローバルな地球村で、マスメディアとインターネットの時代に、東京はもはやガリラヤから遠く隔たっていません。東京のできごとはガリラヤに影響を与え、ガリラヤのできごとは東京に波及するのです。インドの大地震は、私達人類を一つの存在としてゆさぶります。ポルトガルの橋の崩壊事故は私達の心に痛みを与えます。アフリカの洪水やパレスチナの飢餓のしらせに、私達は浄財を送ります。ボスニアの虐殺、ルワンダやカンボジアの大量虐殺は、全世界の人々に精神的衝撃を与えます。悲劇が同情と連帯をひきおこし、被災者の救済活動を通じて、かつての敵は友となります。ギリシャは動かされてトルコを助け、パキстанは先般の大地震の被災者の援助に急いだのです。イスラエルの兵士達が、父親の腕の中に隠れていた少年モハムマド・アル・デューラを殺した時、なんという恥辱に満ちた行為か、と叫ばなかった者がこの世界にいたでしょうか。私達は、人類の連帯の物語を書こうとしているのではありませんか。人類の連帯を強め、すべての国家と

宗教がより緊密になるためにテクノロジーを使おうとしているのではありませんか。私達は、お互い暴力に訴えず、協力して地球に平穏な生活を実現する重要性を学ぶ必要があるのです。

皆様、共に働き、多様性を保ちつつ協力し、強者への服従ではなく、自発的な一致を形づくって行くことにより、嵐がいかにも強くても、打ち勝って行こうではありませんか。

ありがとうございました。